

表、公認会計士、県の担当者ら。理念ややりがい、苦労を話したほか、NPO法人の手続き、会計・税務の留意点などを指導しました。受講料は3千円でした。

このほか、県は新築や民家改修、福祉車両の購入などに対し、補助事業を行っています。県は、富山型デイを2021年度までに小学校区に1カ所、計200カ所開設する目標を掲げています。

講座や補助事業に関する問い合わせは県厚生企画課、電話076（444）3197。

## 共感 広がる「惣万イズム」

2004年10月、長野県東部の東御市で、高齢者も障害者も利用できる共生型施設をテーマにしたシンポジウムが開かれた。

富山市の富山型デイサービス「このゆびとーまれ」で撮影された写真が次々と大型スク

リーンに映し出される。子どもをあやすおばあちゃん、有償ボランティアとして働く障害のある男性……。壇上に立った惣万さんは、マイクを握って言った。

「このおばあちゃんは認知症です。上手に子守してくれるんですよ」

客席の後方で1人の男性が食い入るようにスクリーンを見つめていた。

「これだ」

岩井孝司さん（40）はつぶやいた。障害者の通所施設を辞め、新たな福祉施設を始めようとしていた。惣万さんの話に、心の中がぱっと晴れた。

自分が描いていた小回りの利く柔軟な施設を、惣万さんが既に始めていた。

岩井さんはもともと福祉とは違った世界にいた。プラスチック成形の工場で働いていたが、バブル崩壊によつて会社の経営が悪化。希望退職に応募し、再就職先を求めて行き着いたのが障害者施設だった。

施設では、利用者の思いに応えられない現実に悩む。「困っている人をすぐ助けたい」と思つても、「職員会にかけないと」と言われ、迅速に対応にくかつた。起業への思いが膨らんでいった。

岩井さんのように、富山型デイの理念に共感する人は多い。「このゆ

び」が開所した1993年以降、講演やシンポなどの依頼が次々と舞い込んだ。惣万さんは全国を飛び回つて、自分の考えを広めてきた。

話を聞いた福祉関係者や行政マンらは、自らの目で見たいと富山型デイを見学。理念などを学び、地元で同様の施設を開設したり、補助制度をつくつたりした。

富山県によると、富山型（共生型）デイは県内で92カ所、全国では千カ所を超えている。長野県では「宅幼老所」という名称で、2002年度から民家



このゆびと一まれを訪れ、惣万さん（右）と話す岩井さん  
=2012年11月

改修費などの補助制度が設けられ、岩井さんに追い風が吹いていた。

岩井さんは2年の準備期間を経て06年1月、東御市で「岩井屋」を開所した。偶然名字と同じ「岩井屋」の屋号で蚕の卵を生産していた2階建ての古民家を見つけ、補助制度を活用して改修した。10人の定員に対し、最初のころは1週間に1、2人しか来なかつたが、土、日曜も休まず受け入れ、障害者を中心に利用が増えていった。

岩井さんにとって、惣万さんは先生のような存在だ。岩井屋の開設後、2人は初めて直接会って話をした。岩井さんはそれ以来、ずっと慕っている。12年11月にはスタッフを連れて「このゆび」を訪れた。

「長野でも頑張つてもらわんなん」

惣万さんからの激励に気持ちを新たにした。

## 多様性 「富山型」 地域で七変化

富山型デイサービス「岩井屋」が開所して1年が過ぎた2007年、施設長の岩井さん

は、思いを巡らせていた。

「障害者の仕事を何かつくれないかなあ」

岩井屋を利用する数人の障害者は、お年寄りと日中のんびりと過ごしている。働くだけの体力があつた。

そんな時、お年寄りとの会話が一つのヒントになつた。「今はホウレンソウが旬ですね」「小さいころは稻刈り休みがあつたね」。長野県は農家戸数全国一を誇る農業県。畑や米作りの話題は自然と盛り上がつた。「農園」というイメージが湧いた。

「ここを使わなか

しばらくして、農園の話を耳にした岩井屋近くの休耕田の所有者が、提案してきた。かつて学校農園として使われていた470坪の土地だった。岩井屋は08年春、障害者の就労支援を目的に、農園をスタートした。

ただ、農業はそんな甘くはなかつた。最初の1年は失敗の連続だつた。農園を任せられたスタッフの高橋克也さん(39)は過去に農業法人に籍を置いていたが、分からぬことだらけ。4人の障害者は農業経験が全くなかった。トマトの実は小さく、ニンジンは発芽しない。



岩井さん（手前右から2人目）と、収穫したハクサイを運ぶ利用者  
ら＝長野県東御市

困っていた時、助けてくれたのは、デイに通うお年寄りだつた。散歩がてら農園に来て、剪定の仕方や種のまき方を教えてくれた。おじいちゃんやおばあちゃんが“先生”になつた。アドバイスのおかげで、立派な野菜が実り、地元の道の駅で販売を始めた。今ではハクサイやダイコンなど年間約40種類を栽培し、レストランへの出荷や東京での出張販売も行う。畑は6カ所に増え、スタッフ以外に、利用者約30人が携わる。毎月、賃金も支払つていて。作業に励む男性は「ようやくできた野菜は、自分の子どものようだ」とやりがいを感じ

じて いる。

岩井さんは11年12月、脳出血で倒れ、左腕と左足にまひが残ったが、福祉への情熱は消えていない。

統廃合で使われなくなつた保育園の園舎で、富山型デイを始める構想を描く。障害者が働くレストランや、子どもがカブトムシを育てる中庭などもつくりたいと思つて いる。富山県には新しい新しい富山型デイの形だ。

「みんなが支え合えるのが富山型の良さ。地域の拠点として発展していけばいい」  
岩井さんはそう願つて いる。

惣万さん創設の富山型デイを参考にした共生型施設は、全国に広がり、岩井屋のように地域に応じて、多様な変化を見せて いる。

高知県は、中山間地に「あつたかふれあいセンター」を整備し、誰でも利用できるサロソをはじめ、高齢者らの見守り訪問や、買い物支援などを展開している。熊本県では「地域の縁がわ」という名称で、空き店舗や空き校舎を活用した居場所づくりが進んで いる。

惣万さんが掲げた「誰も排除しない」という理念は、全国各地で確実に浸透して いる。

### 第3章 被災地 今を生きる

原発から5キロ 避難は「念のため」

役場そばにある町営体育館は、床から寒さがはい上がつてきた。2011年3月12日早晨、福島県浜通りの中央部にある大熊町。前日の午後2時46分に発生した三陸沖を震源とする巨大地震と津波に襲われ、小さな体育館は避難してきた百数十人の住民でいっぱいだった。

暖房は自家発電による大型ヒーター1台だけ。家族ごとに、毛布にくるまつて寒さをしのいだ。一晩中、照明がついて住民の話し声やヒーターの音が響いていた。

鈴木美子さん（43）は前夜、自宅から3枚の毛布だけを抱え

